

お寺の社会性

— 生奥坊主のつぶやき —



竹中尚文

1. 親の死に目

先日、週刊誌で「親の死に目に会いたい」という特集を読んだ。仕事を投げ出して、親の死に目に会えるかと言うことであつた。たとえ仕事をしていなくても親の死に目に会える保証はない。「死に目」だけが大切なら、医者になればいい。医者はたくさんの死に目に会っている。

この雑誌の特集の制作者は、昨年3月11日に突然に亡くなった人や、その遺された人のことは意識になかったようだ。あの日、愛する人を失った人に「死に目」を問えるだろうか。「死に目」を問うことに意味があるのだろうか。その週刊誌には「死に目」ではなく、「死」を語って欲しかった。今こそ、「死」を語るべきである。

「死」を語ることは「生」を語ることでもある。誰もがいつかは死んでゆく。死ぬべき人生を生きるのであるが、死が人生の目的ではない。死をプランニングすることもできない。死については時も状況も予定することはできない。自死について問われることがあるが、私は「死にたい人生」を送った人に出会ったことがない。

死を語ることは生を語ることである。「死を迎えるまでの生」と「死を迎えてからの生」である。

2. 葬式坊主とニセ坊主

前号まで、私は葬式の話ばかり書いた。葬儀で終始するのであれば「死に目」を語る週刊誌と大差はない。

私にとって葬儀と七日参りは

一連のことである。葬儀と七日参りは「まんじゅう」の「かわ」と「あんこ」のようなものだと思っている。葬儀が「かわ」で、七日参りが「あんこ」のようなものである。

最近、お葬式だけに来る坊さんがいるそうだ。時には葬儀料金に坊さんの御布施も含まれて、セット料金として提示されている話も聞く。葬儀屋さんに組み込まれた坊さんである。「かわ」だけの「まんじゅう」を食わされているような話だ。葬儀屋さんに「これが普通ですよ」と言われて納得してしまう消費者意識も愚かしい。

ニセ坊主に金を払うようなものだと思って、ふと考えた。ニセ坊主が葬式をして御布施を受け取ったら、詐欺になるのだろうか。法律家である友人に尋ねた。御布施というものが、本物の僧侶に支払われるものであれば、詐欺になる可能性があるそうだ。ニセ坊主では期待されたものを提供できないということである。そうすると、本物の僧侶とは何であるのか。

その宗派の教義も知らないし、気にもならない人にとって、宗派の正式な僧侶であるかないかが詐欺罪の正否を分けるとは思えないと言う。

最近のマスメディアで宗教的知識や意識の裏付けのない表現が気になる。冒頭の雑誌特集にもそれを感じた。ところが、友人の言葉で気付いた。教義も知らないのは坊さんにもいるではないか。先日も知人が「母の七日参りに、仏壇の中の道具やお供えの位置が違っているだの、これを用意しなさいだの、いい加減にして欲しい。それより仏さんの話をして欲しい。七日参りでそれを聞きたいのに」と云っていた。

3. 死ぬまでの生

七日参りは「死ぬまでの生」と「死んでからの生」を問う時だと私は思っている。

かつて遠方に住む友人のお父さんが亡くなったとき、「自分は無宗教だから、お葬式をしないつもりだ」と私に電話をしてきた。

わざわざ坊主の私にこのような電話をくれるのは、そのことに多少のためらいがあったのかもしれない。私はそのためらいが、お父さんへの愛情によるものだと思った。お父さんのことを大切に思う人たちが週に一度集まってみてはどうかと提案した。いろいろな思い出話などが出て、とってもいい集まりになったそうだ。最後には坊さんと呼んだそうだ。七日参りである。

そんなに簡単に、途中から七日参りを引き受けてくれる坊さんはいるのか、と思われるかもしれない。私なら喜んで行くし、身の回りを見渡してみても、引き受けそうな坊さんは多いと思う。

数年前のことである。あるお宅の七日参りにお参りをしていた。そのお宅の隣のおじさんが、ほとんど毎回にお参りしてくれた。そのおじさんは、「私はここのお父さんにはずいぶんと世話になりました。私が高校生の頃、反抗期だったのか、よく親子げんかをしました。家を飛び出したら、ここ

のお父さんがこっそりと朝まで家に居るように言ってくれました。私が非行に走らなかったのはここのお父さんのおかげです」と言って手を合わせた。

また、ある娘さんは「私が、今あるのは、このオヤジのおかげです」と言って涙を流した。その一連の七日参りで、私は父娘のこれまでの話しを聞いた。

死ぬまでの人生を聞くこと、語ることはとても大切な事である。私は、そこに七日参りがあるのだと思っている。

4. 死んでからの生

「ごめんね」という言葉を聞くことがある。亡くなった人に向けられての言葉である。声にならず「ごめんね」と言っている人も多い。

本当に愛している人が亡くなったのだ。「ごめんね。(あなたが死んでしまったのに私が生きていて)」と言っているように思う。謝罪の言葉ではないが、愛する人の死も自分の生も肯定したくな

い。

愛する人の死を表現すること
ばを紹介する。

我が子亡くした親なれば
死んでも死なせはしないと
ただ一人嗚咽す ※

(川添泰信師)

「死んでも死なせはしない」と言
う表現である。現実には死んでいる
のであるが、死んだから「はい、
そうですか」とはいかない。だから
「死んでも生きている」のであ
る。

仏として生きているのである。
こんな表現をすると、また坊主は
煙に巻くと言われる。こんな表現
が必要のない人には言わせてお
けばいい。

先日、41歳で亡くなった方の

七日参りをした。その前の週と同
じように、お経をあげてから振り
返って法話を始めた。小学校5年
生の娘さんが、右手にお経の本を
持って左手に念珠を握りしめて、
食い入るような眼差しで正面を
見つめていた。その目からは涙が
流れていた。彼女は話しを聞き終
わるまで視線を伏せることはな
かった。

どうして仏さまはいるのか？
あなたのためにいるのだ。

「ごめんね」が「ありがとう」
になる。

※『宗教部報 りゅうこく』第82号
(2008年龍谷大学)